



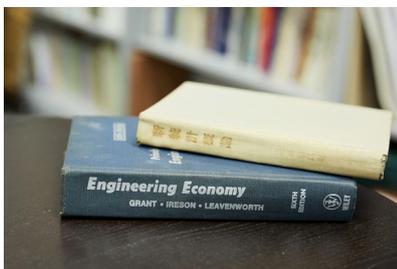
「つなぐ」力の醸成に向けて

社会情報学部教授・学部長

宮川 裕之 さん

MIYAGAWA Hiroyuki

1957年東京都生まれ。1976年青山学院高等部卒業、1980年青山学院大学理工学部経営工学科卒業、1982年同大学理工学研究科経営工学専攻修了。同大学理工学部助手、同大学附置情報科学研究センター嘱託、同大学経営学研究科博士後期課程中退を経て1989年より文教大学情報学部情報システム学科で教鞭をとる。2008年青山学院大学社会情報学部教授、また、2009年より情報科学研究センター副所長、2011年より同所長を経て、2013年同改組後の情報メディアセンター所長。2018年4月より青山学院大学社会情報学部学部長を務める。



学生時代に使用し、とても愛着がある教科書

コンピュータと出会い、広がった世界

——宮川先生は高等部から本学で過ごされました。どのような高校生活でしたか。

当時、大学入試の受験戦争と言われていた時代で、大学に内部進学ができる高校を希望し、青山学院高等部に入学しました。実際に学び始めると自由な校風で伸び伸びと勉強ができ、またスキーにピアノと、大いに勉強以外のことも楽しみました。小さな頃からクラシックピアノを習っていたのですが、高校生の時にジャズと出会い、一時は本気でジャズピアニストになりたいと思っていました。実は今でも夜にお酒を飲みながら弾き語りをするのが好きなんです、誰にも聴かせませんが(笑)。

——大学は理工学部経営工学科に進学、さらに大学院にも進まれました。

高校までは「どちらかと言えば理系」といった感じだったので、理工学部なのに「経営」という言葉が入っている学科がなんだかいいなと思いました。事務システム管理の研究室に所属し、「客観的なデータに基づいて

分析をする」という工学的なアプローチを学んだことは、その後の仕事や日常生活に大きく影響しています。この研究をもっと続けたかったので、大学院に進みました。また、大学ではスキー部に入ったので冬はあちこちのスキー場に行っていました。今も趣味として楽しんでいて、青山に教員として戻ってきた後、2009年からは体育会スキー部の部長になりました。スケジュールが合えば合宿にも参加するようにしています。

大学院では研究の面白さを知り、研究室で平日は寝泊まりして、週末に家に帰るような生活を送っていました。当時は大型計算機の時代でしたが、研究室が購入し当時は非常に希少だったパソコンが面白くて、データ分析のためのプログラムを独学で学び、100を超える解析用のプログラムを作成しました。パソコンとの出会いにより、自分の中でコンピュータや情報システムが大きな比重を占めるようになっていきました。

好きなことを学びつつ経験値を重ねた日々

——大学院修了後も7年間、本学と関わる立場でいらっしゃいました。

大学院修了後は理工学部の助手になり、1982年に開校された当時の厚木キャンパスにも授業を手伝いに行っていました。任期満了後もコンピュータを継続して使いたかったので、情報科学研究センターの事務嘱託として夜間窓口対応の仕事をしてもらいながら、日中はスーパーコンピュータを使ってデータ分析などを行っていました。ここでの立場は教員ではなく職員でしたから、大学の運営は教学と事務組織の両軸で成り立ち、どちらも欠くことのできない役割を担っているということも学びました。その後は教鞭を取る立場になりましたが、事務の目線でも考えることができ、情報科学研究センターでの経験は大変役立っています。

この時期に経営学部の教授と国際財務データベース構築の研究を進めていたこともあり、経営学部の博士後期課程へ進むことにしました。初めて社会人教育も担当し、大手企業の課長級の方々と相手に、夏にはゼミ合宿も行いました。この時の受講生とは今でも交流があり、私が社会情報学部の教授になってからは科目を担当してもらった方もいるほどです。

こうして充実した日々を送っていたせいも、30歳を過ぎて安定した職についていないことに対する不安はまったくありませんでした。周囲の先生方から「いい加減正規の職を見つけたらどうか」と言われ続け、ようやく就職するつもりになったほどです（笑）。そうして文教大学情報学部の専任講師の職を得たのですが、後から聞いた話では、理工系と社会科学系という複数領域での研究活動がユニークだと評価されたことが採用の決め手になったそうです。自分では学際的な学びをしているという意識がなかったのに、そういう点が評価されたことに驚きました。

社会情報学部創設に伴い再び母校へ

——学部創設の際、本学に戻ってきてほしいという依頼があったそうですね。

15年以上青山を離れていた私を覚えていてくれ、また声をかけていた





だけたことは、とてもうれしかったですね。ありがたいことに文教大学も快く送り出してくださいました。

社会情報学部立ち上げにあたっては、私の専門分野である情報システム学が人間活動と情報技術の調和を目指すもので、社会科学と情報科学の融合領域に関わることもあり、さまざまな意見を求められました。また、社会情報学部は社会科学、情報科学、人間科学の三つの領域を融合した教育研究に特徴があります。我々の思考がそれぞれの個別の領域に閉じてしまうと小さな経済学科、情報学科、心理学科の寄せ集めになってしまい、学部の特徴が失われていきます。専門領域をつなぎ、そこから価値を創造する努力をこれからも続けていくことが求められます。融合領域での教育研究、実践力を重視するという学部のコンセプトは大切にしたいと思ってきましたし、学部長になってからも先生方に伝えています。

社会情報学部は、文理融合の学部で高校生やその親御さんには少しわかりづらい学部のように、「入口」の部分はやや苦勞します。一方、産業界は理解してくださり就職率も非常に良く、過去5年間のアベレージは全学部のトップクラスという、「出口」が良いところが特色です。実はこの傾向は創設時から想定していて、その読みがびたりと当たりました。

今後10年の間に、学部立ち上げ時の先生方が退職されます。そうなのでも最初に定めた方向性が忘れられることなく維持されていくよう、先生方に伝えていくことが私のこれからの仕事だと思っています。そして学院全体について言えば、幼稚園から大学、大学院まで一貫教育という理想的な環境を生かした教育を、これまで以上に実践していくことができればいいと思います。たとえば小学校でプログラミング教育が必修化されますが、それにわれわれのような専門家が何らかの形で関わるといった具合です。

——情報メディアセンターの所長を務められていたそうですね。

2009年に情報科学研究センターの副所長に任命されました。その頃、学院や大学は情報科学研究センターのあり方や運営について検討していて、前任校で情報センター長をしていたためか、関わることになりました。自身の専門分野とも関係が深く、コストセンターからプロフィットセンターへの移行が組織の情報部門の課題だという問題意識は長い間持っていました。教学の関係者に加え事務の方々にも参加していただいた大所帯の設立準備委員会で、時間をかけ幅広い議論を積み重ねました。その結果、各学部での教育研究活動を理解しなければ適切な情報環境は実現できないという基本的な考え方のもと、情報科学研究センターの業務を担う専任教員の増員や、大学のみならず設置学校の情報化支援などを含む改善案を検討委員会としてまとめ、大学、法人の理解も得られました。2013年に名称を情報メディアセンターとして再出発し、2016年まで所長を務めました。お世話になった情報科学研究センターでの仕事でもあり、以前一緒に仕事をした人たちとまた仕事できたことも感慨深いものでした。

——在校生へのメッセージをお願いします。

今は変革の時代と言われています。変化の激しいときだからこそ変革の意味を正しく理解し、変わってはいけないこと、変わるべきことを見極める力が求められています。青山学院の学びを通して21世紀に求められる力を身につけ、良い世の中に変えていってほしいと願っています。頑張ってください。